

参加アーティスト (平成 25 年 2 月 8 日発表分)

※アルファベット順

現代美術



藤森照信(ふじもり てるのぶ / FUJIMORI Terunobu)

1946年長野県生まれ。東京を拠点に活動。建築史家として1974年に建築探偵団を結成し、日本の近代建築研究をきわめる一方、1986年に赤瀬川原平らと路上観察学会を立ちあげ、都市の中に意味のずれたオブジェなどを発見するフィールドワークを行う。その後、異形の造形をもつ「神長官守矢史料館」(1991)によって建築家としてデビューし、自邸の「タンポポハウス」(1995)や「高過庵」(2004)など、ユニークな住宅や茶室を手がけ、また施工のために縄文建築団も結成した。土着性を感じさせながら、実際はどこにもない、あるいは見たことがないのに、懐かしさを感じさせる作風は、「インターナショナル・ヴァナキュラー」と呼ばれる。第10回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際建築展(2006)において、藤森は日本館で自作を紹介し、卓越した功績をあげた展示として公式に高く評価されたのを契機に海外での仕事が増え、イギリス、オーストラリア、台湾などでも作品を発表している。2010年は茅野市で宙に浮く「空飛ぶ泥舟」、2012年はミュンヘンで「ウォーキング・カフェ」を制作し、ユーモラスな茶室が話題を呼んでいる。

「空飛ぶ泥舟」2010
courtesy of the artist



マーロン・グリフィス (Marlon GRIFFITH)

1976年ポート・オブ・スペイン(トリニダード・トバゴ)生まれ。マスと呼ばれるトリニダードのカーニバルのコスチューム・デザイナーとして活動後、観客も参加できるパレードの作品を制作している。2004年の Bag Factory Artists' Studios (ヨハネスブルグ/南アフリカ)でのレジデンスでは、伝統的なマスと仮面制作のワークショップを行い、他のアーティストや地元住民とカーニバルを行った。2008年には光州ビエンナーレのパブリックパフォーマンスイベント「SPRING」で、光州事件とトリニダードのカーニバルの起源を題材にした《Runaway Reaction》を発表。パレードのようなパフォーマンスの他に、彫刻作品やインスタレーションも発表している。代表作には女性の首と胸にベビーパウダーでファッション・ブランドのロゴを転写する写真シリーズ《Powder Box》がある。2009年のCAPE09(ケープタウン/南アフリカ)や2012年、マニフェスタ9の関連イベント「コスモポリタン・ストレンジジャー」(ベルギー)などの展覧会に参加。2009年より名古屋を拠点に活動。

《Runaway Reaction》
Gwanju Biennale, Gwanju, South Korea, 2008
photo: 太田朗子



ゲッラ・デ・ラ・パス (Guerra de la Paz)

アライン・ゲッラ(1968年キューバ・ハバナ生まれ)とネラルド・デ・ラ・パス(1955年キューバ・マンタナス生まれ)の2人によるユニット。1996年から一緒に制作活動を行う。ともにアメリカで美術を学び、現在はフロリダ州マイアミを拠点に活動。彼らが拠点とするマイアミのリトル・ハイチは、「ベベ」と呼ばれるハイチ向けに輸出される中古品ビジネス地の近くにある。その取引によって生み出される大量のゴミ処理場行き衣類を2人は主な素材としてきた。工夫して物を再利用することは美術と同じくらいに歴史がある。「衣服が人を作る」ということわざがあるように、中でも使われなくなった衣類は人間のエネルギーとメタファーに満ち、消費や環境問題、個と集団、企業倫理、社会的権力といった世界共通の問題を自ずと浮かび上がらせる。彼らは自らの実践を、思慮深く過激な「考古学」と見なしている。彼らの体感型のインスタレーションは、才気にあふれ、演劇的で、しかも明快である。しかしその作品の意味は澄んではない。というのも、現代生活の矛盾を彼らが体現していること自体を、作品が包み込んでいるからである。

《Follow the Leader》2011
courtesy of the artists



片山真理(かたやま まり / KATAYAMA Mari)

1987年埼玉県生まれ。群馬県で育つ。東京を拠点に活動。片山は、脛骨欠損という、主幹を成す太い骨がない病気を先天的に持って生まれ、9歳の時に両足とも切断している。そうした身体の特徴と、自分自身を取り巻く世界とのかかわりを、10代の頃より、オブジェや写真で表現してきた。それは、少女の頃の義足や小さなハイヒールを身に着けた、私的で内面的な親密さに満ちたセルフポートレート写真であり、実際に彼女が生活し、制作活動もする部屋の姿を、日用品と彼女が作ったオブジェで構成して提示することである。あるいは、彼女自身の手によって丁寧に装飾された両足の義足を提示することや、義足用に特注したハイヒールを着けた彼女自身のパフォーマンスの試みである。「アートアワードトーキョー丸の内2012」のグランプリを受賞。東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修了。

《ハイヒール》2011



ニッキ・ルナ(Nikki LUNA)

1977年フィリピン生まれ。マニラを拠点に活動。フィリピン国内外で活動するアーティストであると同時に社会運動家でもあるルナは、2008年に非営利団体 startART プロジェクトを立ち上げ、性的虐待や紛争等で傷ついた女性や子ども達に対しアートを通じた支援を行っている。彼女の作品は、慣習に縛られ弱い立場に置かれた女性やルイスタ農園で起きたストライキの虐殺事件など、何らかの社会状況をもとに生み出されている。しかし、その表現は決して、声高で説教くさいものではない。卵やプレゼントボックス、宝石等のイメージがたくみに用いられているため、鑑賞者は繊細で詩的な印象すら覚えるだろう。このようにして彼女は社会とアートをごく自然に繋ぎ合わせてみせる。そして私たちの感性を刺激しつつ、抑圧に苦しむ人々について問題提起を行っている。

《Ovoid/Void》2010
courtesy of the artist



バシーア・マクール(Bashir MAKHOUL)

1963年ガリラヤ生まれのパレスチナ人アーティスト。イギリスに活動拠点を移してから20年以上になる。彼はさまざまな素材でモダニズムとポストモダニズム美学を探究してきた。同時に、これらは、彼の出自であるパレスチナ人であること、あるいはパレスチナ人になることの、陰影を持つ政治的な批評を孕んだものとなっている。写真やビデオの技術を応用した初期の豪華な絵画から、近年の拡大レンズを用いたの写真作品にいたるまで、マクールは形式と内容、アートと政治の間の相互関係を探究してきた。彼の作品は美的な誘惑を特徴とするモチーフの繰り返しを用いることが多く、鑑賞者は作品の中に引き込まれていくと同時に、その美しいパターン性を超えた、複雑な何かと関わりあっていると感じる。作品の中には、実は、経済と国家、戦争と虐待が巧みに織り込まれている。《Enter Ghost, Exit Ghost》という今回のインスタレーションは、巨大な迷路であると同時に、アラブ世界の街あるいは難民キャンプの建築モデルでもある。マクールの作品は、英国のみならず国際的にも紹介されている。

《Enter Ghost, Exit Ghost》2012
courtesy of the artist



リゴ 23 (Rigo 23)

本名リカルド・ゴウヴェイア。1966年ポルトガル領マデイラ島生まれ。アメリカのサンフランシスコに活動の拠点を移して20年が経過。活動は移動型で、世界各地のコミュニティの生活空間に深く入り込むことから作品制作が始まり、彼は社会平等の問題に取り組む。彼の作品はまさに「その時」のもので、協働する人々との関係から生まれる。とはいえ、彼は歴史を否定しない。それはコミュニティの記憶を呼び起こす誇りの部分であり、不平不満の部分でもあるから。コミュニティの資産としての過去のドキュメンテーションを利用することもある。彼の野望は、歴史の正統的な語り方と関わることであり、共有されて、その語り方が形づくられていった出来事の、別の語り方を伝えることである。さらに地理を無視しない。それは世界各地で離れ離れにはなっているものの、それぞれの場所における社会的不平等が同一パターンを再構成するからである。そして、場所の直接的なコンテキストも無視しない。公共の空間は、常に政治的に決定づけられるという認識のもとに、作品がその空間を新たに方向付け、更新することを目指す。

《One Tree》1996
courtesy of the artist



studio velocity / 栗原健太郎+岩月美穂 (studio velocity / KURIHARA Kentaro + IWATSUKI Miho)

2006年設立。岡崎市を拠点に活動。栗原健太郎(埼玉県出身)と岩月美穂(愛知県出身)はともに1977年生まれ。石上純也建築設計事務所勤務を経て、studio velocity を設立。前衛的なデザインとかわいらしさが共存する新しい感覚の作品によって、国内外の注目を集める若手建築家のユニットである。名古屋の美容室「曲線の小さなワンルーム」(2010)では、敷地にぐにゃっと湾曲するボリュームを巧みに配置した。岡崎では、内部に小さく分節された空間を抱えた「白い山のような家」(2009)や、円形のプランの上下に別世界を展開させる「空の見える下階と街のような上階」(2012)などの住宅を手がける。第13回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際建築展(2012)で展示した「愛知産業大学言語・情報共有センター」は、2013年に竣工し、彼らの最新作となる。また、ゆらぎを意味するタイトルの個展「fluctuation」(2012)では、0.25mmの極薄フィルムを垂直に自立させた構築物や、床の傷やひび割れをランドスケープに見立てたマイクロ模型など、環境に応答する繊細なインスタレーションを発表した。

「空の見える下階と街のような上階」2012
courtesy of the artists



菅沼朋香(すがぬま ともか / SUGANUMA Tomoka)

1986年愛知県生まれ。名古屋を拠点に活動。名古屋芸術大学デザイン学部デザイン学科卒業。昭和61年生まれ。菅沼は、街の中に埋もれてしまった「昭和らしさ」が残る場所、人や物などを独自の視点においてリサーチし、映像作品《バックトゥーザ昭和》や、屋台型インスタレーション《まぼろし屋台》、そしてアートブックなどの形式で発表している。フィールドワークの手法を用いて、昭和から残る純喫茶やスナックなどに出向き、その場所で出会う人々との関係を構築しながら、彼らのエピソードや記憶を拾い上げ、現代に残る昭和のかたちを探り出そうとする。また、彼女自身の昭和への憧れを体現するかのよう、自らの日常生活においても、そのファッション、生活のスタイルまでも「昭和らしさ」は徹底されている。彼女が行うパフォーマンスもまた作品の重要な要素となっている。今回は、あいちトリエンナーレ2013の会場となる、長者町繊維卸問屋街の中に残された「昭和らしさ」を、長者町で昭和より活動している経営者らへのインタビュー等を元に掘り起こす新作を発表する予定。

《バックトゥーザ昭和》2011
photo: 大畑沙織



ブーンスイ・タントロンシン(Boonsri TANGTRONGSIN)

1978年タイ生まれ。1999年にバンコク大学、2007年にマルメ・アート・アカデミー(スウェーデン)を卒業。現在、タイとスウェーデンを拠点に活動。今回彼女は約11分間の《Superbarbara Saving the World(スーパーバーバラ世界を救う)》(2012)を展示する。数章からなる本作は、世界で頻発する、決して解決されることのない問題を扱った手書きアニメーションである。各章で展開される問題の一つ一つは誰にとっても理解できる。なぜなら、いたる所で起こっているだけでなく、解決しようと試みる人々の間に、同じフラストレーションを与えているからである。作家本人は以下のように解説する。「スーパーバーバラはアダルトグッズから世界の救世主へと変身した旧式のセックス・ドールです。彼女は自らの方法で問題を解決します。スーパーバーバラはヒーローであるとともに、問題の犠牲者でもあります。時折、これらの問題を解決しようとする人が現れます。しかし、遅かれ早かれヒーローは姿を消すだけで、そのトラブルは依然として続いていくのです。」

《Superbarbara Saving the World》2012
courtesy of the artist



和田礼治郎(わだ れいじろう / WADA Reijiro)

1977年広島県生まれ。2000年に広島市立大学芸術学部美術学科彫刻専攻を卒業、2002年同大学大学院芸術学研究科博士前期課程彫刻専攻を修了。加えて、2008年に東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程彫刻専攻を修了した。その後、ベルリン(ドイツ)を拠点に活動。ドイツを中心とするヨーロッパでのグループショーに参加。石を含むさまざまな素材を彫刻の素材として扱うが、2010年より、シリーズで発表している代表的な作品は、真鍮で縁取った複層ガラスを水面と同化するよう浮かべ、水面そのものの存在を視覚化し作品化する「ISOLA(イゾラ)」である。イゾラとはイタリア語で島のこと。これは人間の身体スケールに由来する量モジュールを浮かべるもので、強化ガラス2枚の間に密閉された空気によって、水面と同じ高さに浮かぶ構造になっている。近くから見ると、空を映し出す人工的な幾何学形態であり、遠景では自然の波のきらめきのひとつに同化している。

《ISOLA》
Installation view at Haus am Waldsee, Berlin, 2012
photo: Bernd Borchardt
courtesy of the artist



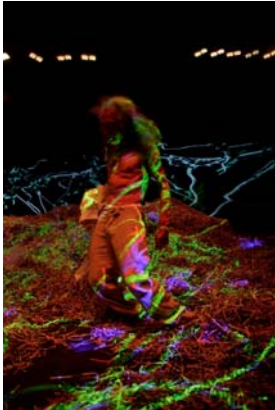
やなぎみわ(YANAGI Miwa)

兵庫県生まれ。京都を拠点に活動。京都市立芸術大学大学院美術研究科修了。1990年代後半より、若い女性をモチーフに、CGや特殊メイクを駆使した写真作品を発表し、とりわけ、制服を身につけた案内嬢たちが商業施設空間に佇む「エレベーターガール」のシリーズで注目を集めた。2000年より、女性が空想する半世紀後の自分を写真で再現した「マイ・グランドマザーズ」シリーズ、少女と老婆が登場する物語を題材にした「フェアリーテイル」シリーズ等を手がける。いずれの作品にも、ジェンダー、若さと老い、美と醜といった女性を取り巻く問題への深い洞察があるとともに、語ること、場を設定することへの演劇的な関心を認めることができる。国内の公立美術館、ドイツやアメリカなど国内外での個展多数。2009年、第53回ヴェネツィア・ビエンナーレ日本館代表。

2010年より演劇公演を手がけるようになり、2011年から新たに演劇プロジェクトを始動させた。大正期の日本を舞台に、新興芸術運動の揺籃を描いた「1924」三部作、明治後期のパノラマ館を舞台にした「PANORAMA」などを美術館と劇場、双方で上演している。

「案内嬢プロジェクト」
鉄道芸術祭 vol.2「駅の劇場」(アートエリア B1) 2012
photo: 井上嘉和

パフォーミングアーツ



藤本隆行+白井剛

(FUJIMOTO Takayuki + SHIRAI Tsuyoshi)

インディペンデントディレクター・照明デザイナーの藤本隆行は、1987年よりダムタイプに参加し、主に照明・テクニカルマネージメントを担当する。個人としての活動では、2007年、白井剛、川口隆夫、真鍋大度ら9名のアーティストと共に制作したパフォーマンス作品「true/本当のこと」を発表。海外も含めた多くのアーティストとコラボレーションを行い、LED 照明をはじめとするデジタルデバイスと人体の高密度の同期化に焦点を当てた、有機的な舞台を構築している。振付家・演出家・ダンサーの白井剛は、伊藤キム+輝く未来、Study of Live Works 発条トでの活動を経て、現在ソロユニット AbsT をベースに、独舞から共同プロジェクトまで様々な形態で、身体と空間/時間のダンスを模索する。映像や現代音楽と親和性の強いダンスで高い評価を受け、パニョレ国際振付賞をはじめ、国内外の賞を受賞している。今回は、舞踏、コンテンポラリーダンスとデジタルテクノロジーを融合した最新作「Node/砂漠の老人」を発表する。

Showing 「Node/砂漠の老人」

photo: 前澤秀登



ほうほう堂(Ho Ho-Do)

新舗美佳と福留麻里による身長155cm ダンスデュオ。これまでに国内外20都市以上で作品を発表。2009年からは劇場から飛び出し、その日の天候や道行く人々を含め、その場所にしかない魅力や特徴を背景に、そのとき限りのサイトスペシフィックなスペシャルダンスを披露する「ほうほう堂@」シリーズを展開している。カフェ、建物の廊下、学校、トンネル、民家をはじめ、日常と隣り合わせにある面白そうな場所や、旅先で出会った場所、紆余曲折の果てに辿り着いた穴場スポットなど、月に1回さまざまな場所で踊り、YouTube にアップ。また、ほうほう堂の振付に、複数のミュージシャンが異なる音楽を合わせることで、これまでとは違う作品の見え方を引き出す「ほうほう堂×DJs!!」シリーズを行うなど、ダンスの拡張を多種多様な方法で試みている。

photo: 新井梨里子



プロジェクト FUKUSHIMA! (PROJECT FUKUSHIMA!)

(総合ディレクション: 大友良英)

東日本大震災と、震災によって引き起こされた東京電力福島第一原子力発電所の事故は、地震と津波の被害に加え、放射能汚染という未曾有の事態を福島にもたらした。その福島から、「いまの福島」と「未来の福島」の姿を全世界に向けて発信していこうとするプロジェクト。福島出身/在住の大友良英(音楽家)、遠藤ミチロウ(音楽家)、和合亮一(詩人)の3名を代表とし、県内外から集まった有志によって2011年5月に立ち上げられた。同年8月15日に福島市内で開催した「フェスティバル FUKUSHIMA!」には約1万人が来場し、翌年は「世界同時多発フェスティバル」に拡大。その他、インターネット放送局「DOMMUNE FUKUSHIMA!」の運営、学びの場となる「スクール FUKUSHIMA!」の実施、共鳴するアーティストによる作品発表の場と支援金募集の仕組みを兼ねた「DIY FUKUSHIMA!」など、複数の活動を継続的にやっている。

「オーケストラ FUKUSHIMA!」 2011年8月

photo: 藤井光



ジェコ・シオンポ (Jecko SIOMPO)

1975年生まれ。インドネシアのジャヤプラで育つ。幼少のころより伝統舞踊を学び、1994年にジャカルタ・アーツ・インスティテュートに入学してダンスを専攻。1999年、ヒップホップをアメリカのポートランドで学ぶ。2002年、奨学生としてドイツのフォルクスヴァンク・ダンス・スタジオにて学ぶ。インドネシアのさまざまなダンスのスタイルを学んだが、その実践にとどまらず、パプアの文化的背景を生かした独自のスタイルを追求しながら、振付作品を発表している。作品はインドネシア国内各地をはじめ、マレーシア、シンガポール、日本、ドイツ、デンマーク、オーストリア、アメリカ、フランス、台湾、香港、韓国そしてロシアなどにて上演。パプアのダンス文化とのフュージョンという側面だけでなく、ジャカルタのサブカルチャーであるヒップホップを、自身の振付の世界に持ち込んだ。カンパニー作品としては待望の日本初公演となる。

「Room Exit (Terima Kost)」



梅田宏明 (UMEDA Hiroaki)

2002年にフランスの Rencontres Chorégraphiques Internationales のディレクターに評価され活動を海外に拡げる。その後、ヨーロッパを中心に世界各地の主要フェスティバル・劇場に招聘され、2008年には Festival d'automne à Paris 及び Romaeuropa と共同製作を行う。2011年、YCAM との共同製作で「Holistic Strata」を発表。2009年、振付プロジェクト「Superkinesis」を立ち上げ、初のグループ作品「1. centrifugal」を、2010年にヒップホップダンサーを採用した「2. repulsion」を、2011年にバレエダンサーの振付作品「3. isolation」を発表。2010年、Prix Ars Electronica 2010 Honorary Mention を受賞。近年はビデオインスタレーションなどへも表現活動を拡げ、あいちトリエンナーレ2010では「Haptic installation version」を発表。今回上演するアジアダンサーによる「4. temporal pattern」は、梅田にとってアジア初の劇場間共同企画により製作される最新作。

「Holistic Strata」

photo: 丸尾隆一(YCAM)

courtesy of Yamaguchi Center for Arts and Media



ペーター・ヴェルツ+ウィリアム・フォーサイス (Peter WELZ + William FORSYTHE)

ドイツ人マルチメディアアーティストと、アメリカ人振付家によるコラボレーション。1972年生まれのヴェルツは、ロンドン、ニューヨーク、ダブリンでアートと彫刻を学び、主に彫刻や映像インスタレーションを制作・発表している。フォーサイスは世界最高の振付家のひとり。バレエの実践を、古典的なレパートリー上演から21世紀にふさわしいダイナミックな芸術形式へと方向転換させたことで知られ、根本的な組織原理への深い関心によって、インスタレーション、映像、ウェブベースの知識創造など、幅広い創作活動を行っている。2004年に発表された本作は、ソロで踊るフォーサイスを5台のカメラ(内2台は本人が装着)で捉え、5チャンネルビデオで見せる画期的な映像インスタレーション。フォーサイスが中空に書き記す作品タイトルは、劇作家サミュエル・ベケットの散文作品『いざ最悪の方へ』に由来する。

《whenever on on on nohow on | airdrawing》

Five channel video installation in collaboration with William Forsythe

2004, edition 5 + 2 AP

Installation view Museum für Moderne Kunst MMK, Frankfurt

photo: Klaus Peter Hoppe

courtesy of the artist, Peter Welz | Studio